The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	G.ジンメルにおける人間の科学の理念 ： 人間と認識の媒介の論理
Author(s)	廳, 茂
Citation	大阪大学, 1994, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/39300
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【８】

氏　　名	廳（ちょう）　茂（しげる）
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学位記番号	第　１１５４７　号
学位授与年月日	平成６年１０月５日
学位授与の要件	学位規則第４条第２項該当
学位論文名	G.ジンメルにおける人間の科学の理念 －人間と認識の媒介の論理－
論文審査委員	(主査) 教授　厚東　洋輔 (副査) 教授　山口　節郎　　教授　三島　憲一

論文内容の要旨

Ⅰ課題の設定

本稿は，G.ジンメルの思想において「科学と倫理」問題を核心とした「人間科学論」的関心が生涯を通じて一貫して中心的に重要であったことを論証するとともに，同時にこの関心への視点をジンメル研究において用意することによって，無連関の断片とされてきたジンメルの多彩な仕事に包括的な全体的統一像を与えることを課題としている。

ジンメルは終生学問論的作品を継続的に発表しつづけた。その意味でこの視角の重要性は，一見自明であるかのようにみえる。だがこの視角は，従来の研究史においてほとんど掘り下げられてこなかった。というのも，この関心の重要性の論証とその視角からの全体像の描出をさまたげる二つのアポリアが障害となってきたためである。すなわち，その一つは，科学への関心といわゆる個別科学としての形式社会学への関心が，一体どのような関係をもつのか不明瞭であるという問題である。従来の社会学史は，ジンメルの科学関心を形式社会学に狭隘化して同一視してきたが，これでは前半期の学問論的作品の多くは理解不能となってしまわざるをえなかった。二つめの難問は，前半期の科学的認識への関心と後半期の哲学，形而上学への関心の，一見まったく架橋しえないほど大きくみえるずれをどう調停するのかという問題である。このずれのため，後半期のジンメルの作品の意味は，科学への関心の観点からするかぎり，まったく不明とされざるをえなかったのである。

この二つの障害をいかにうまく克服し，ジンメルにおける「人間科学論」的関心の一貫した重要性と意義を証明することができるかが，本稿の最大の眼目となる。もしもジンメルにおいてそれが説得的に論証できるならば，この関心の視角から従来の水準をはるかに越える広いジンメル思想の全体像を提起することが可能となるはずである。というのも，この視点は，個別科学と科学一般，科学と哲学といった従来のジンメル研究において無媒介に放置されてきた二元的な関心の共通の包括的土俵を設定できるのみならず，「個人と社会」，「近代と人間」，「文化と生」，「人間と陶冶」といった彼が言及した様々の関連性の見通しにくい根本問題を「科学と倫理」問題の親和的なヴァリエイションとして取り込みうるという決定的な利点をもっているからである。

本書の論述の全体は，問題設定にかかわる序章を除けば，前半期の人間科学論（第２－４章）と後半期のそれ（第８

－11章）との間に，前者の変容の意味を考察することで前期と後期の統一的連関性の必然性を論証する中間項（第5－7章）を配置するという，大きくは三つのパートから組み立てられている。

Ⅱ「人間の社会の科学」の定礎

まず必要なことは，前半期ジンメルの人間の科学への関心の内容を正確に特定することである。これを論文は，ジンメル初期の民族心理学論や相互作用ならびに現実主義的科学といった概念の考察をもとに究明する。このことが第2章「人間の科学への関心の所在」の課題である。ジンメルは，人間の科学は社会の科学であるべきだと考えることで，「人間の社会の科学」の形態と意義を独自に規定しようとした。この課題は前半期ジンメルの思索の最大の主題であり，じつは形式社会学的関心はその部分的な問題要素の一つにすぎなかった。ジンメルは，事実と規範の区別を前提に，一方で実証主義同様経験の立場を確立しようとするが，他方で両者の相違のうえにその新たな関係づけの論理を構築しようとした。この「科学と倫理」の革新された相関問題こそが，彼の人間の科学をめぐる思索の核心となる。ジンメルはこの思索を，科学の認識論的アプリオリの分析と前科学的な倫理学的関心の具体的提起という二つの論点のもとに展開しようとした。前者は，第3章「『社会学的』人間科学の認識機制」，後者は第4章「科学と倫理」において論究される。この二つの連関する主題において，ジンメルは経験的認識のアプリオリに独特の仕方で倫理・哲学的契機の存在を指摘する。すなわち，彼はこの前科学的契機として，全体の歴史哲学的先取りと個人への倫理学的関心を設定するのである。このことによって，ジンメルにおける「科学と倫理」問題は，あるべき個人と現実にある社会の関係，すなわち「個人と社会」問題ともなる。彼の人間科学は，倫理学的個人関心にもとづく前科学的な社会哲学的思弁から経験的，因果的な個別社会諸科学への上昇という構図においてまず設定されるのである。

Ⅲ近代認識と個人関心の深化

人間の科学への関心が一見後退してみえる前期と後期のずれの意味を考察するため，論文は，第5章「現実と倫理の乖離」において，問題をジンメルの近代における個人の位置の現状認識と倫理学的個人関心の進展の動向という視角から解明することを提案する。なぜなら，前半期のジンメルの科学論の前提には，社会分化と個人の確立の相互的促進関係についての暗黙の見込みが前提されていたからである。このジンメルにおける認識関心の動態原理ともいうべき前提は，前期から後期にかけて重大な点で変容する。というのも，一方でジンメルの近代認識は，近代は個人を産むと同時にそれを疎外するという事態を確認するとともに，他方で彼の倫理学的思索は，目指すべき理念的個人は近代が制度的に用意する量的個人ではなく人格的な質的個人であるという結論にいたるからである。現実の社会と理念的個人のこの相互的な反撥によって，社会を認識によって媒介する科学と個人関心に指向する倫理も，致命的に切断される。いわゆる生の思想は，前半期の倫理学的個人関心の発展形態である。そこにおいて一見認識関心が後退してみえるのは，科学と倫理の両主題の自明の連関性がこのように切断されてしまうせいである。とすれば，後半期ジンメルにおける「人間科学論」的関心の積極的な存続は，彼が現実の社会と理念上の個人を架橋しなおす問題意識をなお保持しつづけていたかいなかに依存している。論文は第6章「完全な社会」，第7章「人間学的育成論モチーフ」において，この架橋問題をめぐる思考系列の存在を克明に辿る。後半期ジンメルの科学への関心は前半期のそれの意味のない残照であるという従来の定説が，そこで訂正される。ジンメルは，社会認識の媒介による個人の現実咀嚼力の強化という人間学的育成論の方向から事態の打開を目指した。人間の科学は，そこにおいて決定的に重要である。

Ⅳ人間の科学論の発展

前半期の「科学と倫理」問題は，後半期「倫理と科学」問題に転換する。なぜなら，後者においては前者において親和的と想定されていた社会的現実と理念的人格可能性の切り離された関係を修復するため，認識の倫理学的人間形成への貢献がとくに問題として前景化するからである。この転換は，全面的な質的変容とみなすべきではない。そうではなく，それは思索の継承的な進展による問題の部分的アクセント移動を伴った議論の深化ないし完成である。ジンメルは，社会認識の育成論的意義を確立するため，前半期のように経験科学の前の位相のみならず，それに加えて新たにその後の位相にも倫理・哲学的契機を配置することで生と認識の循環的促進関係の構図を完成させようとした。この完成は，「社会学」と「理解」の両概念の検討において遂行された。このうち前者は第8章「『社会学的』人間科学の認識機制論再考」，後者は第9章「認識と生」においてそれぞれ究明される。この両章において，論文は，いまだ研究史上統一的に

考察されたことのない後半期ジンメルの学問論的諸著作を，前半期のそれと関連づけつつ，はじめて包括的に検討する。ジンメルは，経験的社会認識を個人の人格論的陶冶につなげる媒介項として，一方で個別社会諸科学のうえに「一般的社会学」と「哲学的社会学」の問題圏を提起する。第8章はこの二つの概念の意義と形成史を具体的に考察する。他方ジンメルは，同じこの媒介項の問題を，生と認識の間を理解概念によって結ぶことによっても考えようとしていた。第9章はこの媒介の要点となる「事象的理解」概念の意味を，動機理解概念との対比において詳細に検討する。ジンメルの人間学的育成論を目標とした「科学と倫理」問題は，学問論から教育論への進展において実践的に完成すると考えられていた。彼の晩年の教育論は学問論に対応している。第10章「学問論から教育論へ」において，論文はジンメルの人間科学論の最終の論題である教育論を吟味する。第11章「ジンメルの人間科学論の位置規定へむけて」は，結びとして，科学と哲学の独特の分節的認識機制論からなるジンメルの人間の科学の理念を統一的に総括するとともに，相似した問題を追求していた同時代のトレルチとウェーバーを引照することで，その理念の思想史的特性を最終的に確定しようとしたものである。

以上の考察において本稿が掲げた課題の一つ，ジンメルにおける人間科学論的関心の一貫した継続的重要性と統一性が論証される。従来この論証の壁となっていた二つの難問は，ジンメルの人間の科学への関心の基底を社会の科学一般にみいだすとともに，一方で前半期の認識関心の背後に倫理・哲学的な人間や歴史への関心が，他方で後半期の生への形而上学的関心の背後に社会の学問的認識関心が抽出されることで克服される。学問論的関心の一貫した重要性の論証は，また第二の狙いをも保証した。すなわち，本稿は「科学と倫理」問題と他の諸問題との連関性を解明することで，偶然的な断片の集積としてみられることの多かったジンメル思想の従来よりはるかに広い統一的全体像を提示しえたのである。

論文審査の結果の要旨

ゲオルク・ジンメルの思想的生涯の全体像を描き出す，というのが本論文の眼目であるが，社会学者も含めて，思想史研究家がこれまでこの課題をうまく解けなかったのには，二つの理由があると思われる。①1905年位をはさんで思想の劇的な変貌が存在し，前期と後期のつながりが理解しがたいこと。②業績の多くが，多彩なテーマについて新鮮なアイディアを提示するエッセー的な色彩が強く，その全体を公平に見渡し難いこと。

本論文は，こうしたジンメル研究の難所を二つの工夫を施し，克服する。まず第一に，社会学史vs哲学史という従来からの専門的区分を横断するような「人間科学史」という新しい土俵を用意し，「社会の科学」を「人間の科学」と相即するものと捉え返し，ジンメルを19世紀における「人間科学」史上の展開の一こまとして解釈する道を切り開いた。第二に，ジンメルのなかに，社会のあり方と人間のあり方とを対比的に特徴づけるさまざまな二項対立を取り出し（歴史の認識vs人間の生き方，あるいは科学vs倫理等々），前期から後期への変貌を，こうした対立する二項間での力点の移動として，統一的に理解する道を切り開いた。

独自に開発した分析枠組に従い，科学的認識の優越として見られてきた前期の業績の中に，人間の生き方，倫理への関心が躍動していたことを掘り起こし，他方，科学への絶望としてのみ見られてきた後期の業績の中に，認識論への関心が持続的に存在していたことを捜し当てる。これまで背景におかれていた業績に照明を当てることによって，前期／後期といった固定した既成の二分法が流動化され，ジンメルの統一像があぶり出される。

以上述べたように，本審査委員会は本論文が，人間科学思想史という問題設定，文献の着実な読破，説得性のある全体像の提示の三点から見て，博士（人間科学）の学位を授与するのに十分に値すると判断した。